

井 口 克 己

ミミズと菊のファンタジー

五 月 書 房

井口 克己（いぐち かつみ）

1940年岡山県英田郡作東町白水に生まれる。

慶大中退。日大卒。現在早大文芸専攻科・法大大学院社会学
専攻博士課程在学中。

「牛」で末川賞に入選。中国文学に関する論文，翻訳，ルポ
と詩，脚本，シナリオ等がある。

「農民文学」編集委員

住所 196，東京都昭島市玉川町4-11-8（電話0425-41-6554）

ミミズと菊のファンタジー 定価 六八〇円
昭和四六年九月一〇日 初版

著 者 井 口 克 己

発行者 竹 森 久 次

発行所 五 月 書 房

東京都千代田区三崎町二―八―二

電話（三三）四四九〇

振替東京 三三九四三

郵便番号 一〇一番

目

次

山柿の季節	……	七
谷間で	……	一四
成人の日	……	三四
真赤な豚に乗った青年	……	四三
ミミズと菊のファンタジー……		六〇
忘年会	……	一〇五
兎	……	一二四
真夏の午後	……	一二七

二匹の青大将
……………三六

馬
……………一四七

行き倒れ
……………一六九

牛
……………一八八

優等生
……………二二七

跋・巨体の目
南雪道雄……………二五〇

あとがき
……………二五八

ミミズと菊のファンタジー

山柿の季節に

ぴかドン爆弾がおちて日本が戦争にまけてしまつてから、谷間に二度目の秋がやつてきた。

きょうはまっていた秋祭だというのに、御輿も鼻高も出なかった。子供たちはむりに出してもあとで進駐軍がきて叱かられてはかなわん、とおじいらのはなすのをきいた。子供たちは谷間中をかくれ場所にしてかくれんぼをした。

カツミとクニコは、セツ姉^{あね}えの薬家のうらの小笹のなかにかくれた。二人はしぶ柿の干皮をくいながら、息をひそめて鬼のくるのをまっていた。と、向こうの障子のなかで猫がふみつぶされたような声が二、三度きこえた。おばあが怒鳴る声もした。カツミは、五月ごろ河原で乞食^{オイト}のおっさんがあんでくれた小さな竹籠に柿の皮をもどすとぞうりを手にもって、そつと小笹のなかからはいだした。

クニコは小笹のあいだから納戸にちかづくカツミをみつめていた。縁側に手をかけたかとおもうと、ポソッとおおきな音がして腐れていた板がおれた。カツミは縁の下にすばやくはいこん

だ。クニコは鬼にみつかりはしないかと心配だった。だが誰も怒鳴らなかったし、鬼もやってはこなかった。カツミは頭だけを縁側の上にだして、障子のやぶれ穴にむかって目をくぎづけにした。しばらくしてこんどは音もなく裸足でもどってきた。カツミは腹で息をしながら、クニコのDDTのついた耳に口をちかづけてささやいた。

『セツ姉が……むしろの上で裸になってねとる……おじいとおばあが両方の足をおさえて』

『籠あみの乞食ホイトに飯くわせたで叱られたんじゃろ』クニコが小声でいった。

『わからん……おまえ行てみい』

クニコはまるで風のようにそつと縁側にちかづき、音もなく上にあがって障子に目をびったりとつけた。あの声がまたしたが、クニコはびくりともしなかった。カツミははらはらしてみてはおれなかった。クニコはしばらくして、いままでにみたこともない悲しいようなびくりしたような顔つきでもどってきた。

『セツ姉えの……お姉えの尻におおきな穴があいて……赤い丸いもんが』

『牛に突かれたんじゃろか？』

『……』

そのとき『殺してくれ、苦しい』とセツ姉えの聲がはつきりきこえた。クニコはカツミのよこに黙ってすわりこんだ。クニコは笹の葉のあいだから澄みきった空に目をうつした。カツミもすぐそれをまねた。ひよろ高いくろい木のとっぺんに竹竿ハズのとどかない八平柿ヤヘイガキが三つ、かたむきか

けた陽光にぴかっとひかっていた。とおくの杜で太鼓がにぶくきこえた。

カツミはしずみこんでしまったクニコのことだけが心配だった。

『山柿とりに行こか?……富有じゃ。わしだけが知つとる甘柿じゃ。……狐びらのあけびもうまいぞ』と、カツミはいった。

クニコが黙ってさきに立ちあがった。

山道になるとカツミがさきになってのぼっていた。せまい谷あいには落葉で黄色くはえて静かだった。青い樅のこずえから鶇がピーピー鳴きながら谷をわたり、雉のよび声もきこえた。カツミのつまさきに紫色のとかげがはいしたが、いつものように指でつまみあげなかった。

あけびはもうみな落ちてしまい、からだだけがつるについてくろくなっていた。だがカツミは夢中できなかった。いまあけびがないといったら、クニコが泣きだしてしまいそうだったからだ。日蔭のほうの木の枝に、小さなあけびが二つみつかった。カツミはぐらぐらゆれる木をすばやくのぼって取ってきた。クニコは黙ったまま一つをホームスパンのうわっぱりのポケットにしまい、一つはあいている右手でもった。あけびはいがいに大きく、クニコの手からはみだしていたが、黙ったままにいるのが、カツミには不満だった。

山のむこうのほうから、笛の音がきこえたようだった。

『あれはバスの汽笛じゃ』自信たっぷりにかツミがいった。山びこが、おなじことをくりかえし

た。

『汽車の汽笛じゃよ。バスはラッパしかねえ』クニコが口をひらいた。

『おまえ乗ったことがあるんか』

『ねえけど……お父うが戦争からもどって、うちが学校にあがったら乗せてやるいうて、お母あが……』

『もどるんか』

『死んだいうて通知がねえで、もどってくるとおじいがいうた』

『おら乗れんのう……汽車に』

カツミのお父うは南洋のヤップ島で戦死していた。

『うちが一緒につれて行つたる』

カツミは頭をたれて黙りこんだ。

『山柿はどこにあるんじゃ。なあカツミ』

カツミは柿などどうでもよかった。しばらくして黙ったままめちやくちやに林のなかをのぼっていった。クニコもポケットをおさえてあとを追った。落葉がカサカサ音をたてた。カツミは四方をみわたせる頂上でまっていた。

『泣いとおったんか？』クニコはあえぎながらいった。

『山柿はあっちじゃ』カツミは、涙をぬぐおうともせず、調子はずれの声でいいながら谷底を指

さした。

カツミはまたさきに坂を走りくだった。クニコもころげながらあとにつづいた。カツミは自信がなかった。死にたえた——おじいとおばあは労咳で、二人の兄んちゃんは戦争でやられた——隣家の畑に富有柿がいっぱい接木してあるのを、三つになったばかりのおりに、はじめておじいが山につれてきてくれ、誰にも内緒にせいと教えてくれた。だが、カツミはもう二年も前のことで忘れていた。

『くさいなあ』追いついたクニコが息をきらせていった。

『蛇でも死んどんじゃろ』とカツミ。

クニコは前方のひくい林のなかに、弱った山兎がいるようにかんじてちかづいた。が、その一問ばかり手前でびたりと足をとめて、じっと動くものをみつめてからふりむいた。

『籠あみの乞食が、ひとりで寝とる』クニコがいゝた。

カツミは、走りよった。

『糞と一緒にゃのう』とカツミ。

乞食は足と腹と胸をだしたままだった。それは骨とうすぐろい皮だけで、まるで野ざらしのかかしが土田のなかにたおれて腐っているようだった。よごれていたが、白い髪が六寸ほどのびており、ひらかない目のくぼみに小さな蟻のはう落葉が一枚のついていた。歯のない口がかすかにうごいたが声はでなかった。

『腹がへっとなんじゃ』とカツミ。

クニコは、あけびの実をひとつ口にに入れてやった。カツミは乞食の鶏の足のような爪のある右手——左手は茅と背中の下におれこんでいた——をもちあげて腹の上においてやった。手は鳥のついでんだ熟柿をにぎっていた。その上をきんきらばえやあぶがとびまわった。

『柿の畑はここじゃ』カツミは喜々とした声をあげた。

『ほんとじゃ……そこにあるわ』とクニコ。

乞食は口の中で卵のようなあけびを舌でおしあげながら、かすかに頭をよこにふっていたが、そのうち動かなくなった。

二人は夢中で雑木の下になっている柿の木に走りよってぶらさがった。だが、柿は小さいのが三つ四つしかなく、それも青くてかたかった。

『こことちがうんか』クニコはかるい竹籠をふりながらこぼした。

『あの乞食がくうてしもたんじゃ』

遠くで汽笛がなった。

『帰ろう……道にまようてしまうぞ』とカツミ。

汽笛は六時の合図だった。二人はあともふりむかずに走った。

家につくと暗くなりかけていた。裏口からそっとはいったが、おじいによこつらをはられた。

竹籠から山柿が三つこぼれた。

『おじい……山で乞食が……』クニコが泣きながらいいかけたが、カツミが髪をひっぱってやめさせた。

『じいハセツの子喜び^{コヨロコ}に行^イてくるで、まっとれ。クニも、お母あが手護^{テゴ}に行とるでここにおれ』おそろしげな声だった。それから『亭主がもどってくるちゅうのに、わけのわからねえ子をうみやがって』とつぶやいてでていった。

二人は夕飯をくうのもわすれて、つめたい木綿ぶとんにはいこんだ。クニコはいふさつて、かたい柿に歯をたて、カツミは暗い裸電球をみつめていた。

『籠あみの乞食は死によったんじゃ』クニコがつぶやいた。

『セツ姉えは子をうみよったんじゃ』カツミがひとりごとをいった。

谷間で

新しくできあがった、白いコンクリート橋のたもと「日の出屋」の前に、黒山の人だかりがしていた。

『ミチが盗んだんじゃない』

幸子は泣いているミチのポケットに手をいれようとしている若い警官に、五尺八寸の体をぶちかました。警官はよろけてうしろに止めていたオートバイを倒し、したたか尻をうちあげてとまった。

『なにすんだ、色気狂い……お前も一緒にぶちこまれてえのか』

『やれるもんならやってみな、お前に』

ミチは母親が毎日土方に行っても、涙ひとつ見せず、転んでなま爪をおこし、すねぼんを血にそめたくらいでは泣きもせず、ひとり黙って遊ぶ子供である。だがいま細い腕をねじあげられ、いつもやさしい幸子が酔っぱらいのように怒り狂っているの、生まれてからずっと五年間ためていた泣き声を、一度にはきだすようにいがりたてていた。ミチは、幸子の胸元のひらいた黄色